

淀川水系河川整備計画案に対する京都府域への  
効果等に関する技術的評価  
(中間報告) (H20年9月)について

---

この資料は、当時の報告書を要約したものです。

参考資料 1

## 1.はじめに

---

- 平成20年6月20日、淀川水系河川整備計画案が国土交通省近畿地方整備局より示され、淀川水系流域委員会と整備局の意見対立が残ったまま各府県に意見が求められた。
- 最良の事業の組み合わせは何か、より効率的、効果的な進め方はないのかということを府民に合理的に説明するために、まだ詳細な検討が必要な課題がいくつか残っている。
- このため、府に特に関わりの深い事業の必要性とその効果について客観的評価を行うため、学識経験者による技術検討会を設置した。
- 技術検討会では、①各ダムの京都府域への効果、②耐越水堤防、堤防強化との最適組み合わせと他の代替案、③桂川の対策、④京都府としての優先順位、を集中的に検討した。

## 2.京都府域の治水安全度の現状

- 淀川本川に対して上流の各支川及びさらに上流に位置する京都府管理区間河川のレベルは低い。

河川	治水安全度(H20時点)
府管理区間、支川	下流直轄区間に比較し治水安全度が低い
桂川	嵐山、上桂、大下津付近で戦後最大に対して能力が不足
宇治川	塔の島で戦後最大
木津川	部分的に流下能力が低いが、全体的には戦後最大には対応
淀川本川	計画高水流量に若干不足している程度で、戦後最大には十分対応

### 3.堤防強化、耐越水堤防化との最適組み合わせ

---

- 耐越水堤防化は、計画論とは切り離して考えるべき
- 堤防強化は、鋭意進めていくべき
  - 計画規模の洪水でHWLを超える可能性がある場合は、天端までの護岸などの整備も考えるべき
  - 桂川は水位を下げる対策を最優先して進めるべき
  - 木津川は、砂でできた堤防が多く、優先度の高いところから堤防本来の機能確保と、水位を下げる対策も併行して進めるべき
  - 宇治川は、琵琶湖後期放流により長時間高水位が継続するため、通常より厳しい条件で安全性の照査を行うとともに、対策が必要な区間では、より信頼性の高い堤防強化を行う必要がある。

## 4.桂川の対策

---

- 桂川上流域
  - 広大な用地提供の協力を得て、平成8年から本格的に工事着手
- 日吉ダム
  - 暫定運用として洪水時放流量を150m<sup>3</sup>/sまで絞りこむ操作を実施
  - 日吉ダムの暫定運用を本来の運用に戻すためには保津峡の開削も含めた河道改修の進展が不可欠
- 保津工区
  - 嵐山下流の治水安全度が低い状況では、直ちにこれ以上の改修を進めていくことはできない。
  - 今後、下流の改修による無害流量の増加量に応じ、段階的に進めていくことが現実的のため、下流直轄区間の改修を促進させるべき

5.天ヶ瀬ダム再開発、大戸川ダムの京都府域への効果  
6.川上ダムの京都府域への効果

---

- 天ヶ瀬ダム
  - 再開発後は、現行より大きな洪水に対しても最後まで洪水調節可能
  - 再開発後は、琵琶湖後期放流の期間が3/5程度に短縮
  - 三川合流地点の水位観測体制の強化も含め、宇治川の安全確保を考慮すべき
- 大戸川ダム
  - 大戸川ダムの検討に用いられた33パターンの洪水では、効果を端的に表現することが難しい。
  - 大戸川ダムは天ヶ瀬ダムの安全な運用には役立つが、整備の途中段階では、既存施設の有効活用なども念頭にすべき
  - 大戸川流域への効果等は滋賀県で実施予定の検討結果を尊重
- 川上ダム
  - 岩倉峡を開削しない前提のもとでは、上野遊水地と川上ダムの洪水調節に期待するのが有利

## 大戸川ダムの効果に関する検証結果

- 二次調節なしで枚方流量が流下能力(10,700m<sup>3</sup>/s)を超過する2洪水(No.3, No.22)は、天ヶ瀬ダム再開発のみで必要容量(計画上1,667万m<sup>3</sup>)がまかなえる。(下表緑枠)
- 二次調節によって天ヶ瀬ダムが容量不足になる洪水(No.16)は、二次調節なしでも枚方流量が流下能力に収まる。(下表橙枠)

No.	対象洪水	二次調節なし	二次調節あり	No.	対象洪水	二次調節なし	二次調節あり		
		枚方流量	天ヶ瀬必要容量			枚方流量	天ヶ瀬必要容量		
1	枚方	S28T13×1.18	10,167m <sup>3</sup> /s	2,273万m <sup>3</sup>	13	加茂	S34T15×1.22	8,858m <sup>3</sup> /s	133万m <sup>3</sup>
2		S34T7×1.38	10,288m <sup>3</sup> /s	1,938万m <sup>3</sup>	14		S36_10×1.38	10,170m <sup>3</sup> /s	1,188万m <sup>3</sup>
3		S34T15×1.45	11,002m <sup>3</sup> /s	987万m <sup>3</sup>	15		S40T24×1.48	9,173m <sup>3</sup> /s	1,310万m <sup>3</sup>
4		S36_10×1.35	10,431m <sup>3</sup> /s	1,581万m <sup>3</sup>	16		S57T10×1.38	9,946m <sup>3</sup> /s	2,635万m <sup>3</sup>
5		S40T24×1.55	10,207m <sup>3</sup> /s	1,998万m <sup>3</sup>	17	島ヶ原	S28T13×1.21	10,056m <sup>3</sup> /s	2,272万m <sup>3</sup>
6		S57T10×1.25	9,266m <sup>3</sup> /s	2,163万m <sup>3</sup>	18		S36_10×1.42	9,917m <sup>3</sup> /s	1,068万m <sup>3</sup>
7	宇治	S28T13×1.02	8,559m <sup>3</sup> /s	894万m <sup>3</sup>	19		S40T24×1.48	8,954m <sup>3</sup> /s	1,192万m <sup>3</sup>
8		S34T7×1.54	10,126m <sup>3</sup> /s	2,021万m <sup>3</sup>	20		S47T20×1.48	9,754m <sup>3</sup> /s	897万m <sup>3</sup>
9		S36_10×1.33	9,179m <sup>3</sup> /s	890万m <sup>3</sup>	21	羽束師	S34T7×1.27	8,744m <sup>3</sup> /s	1,024万m <sup>3</sup>
10		S40T24×1.32	8,076m <sup>3</sup> /s	474万m <sup>3</sup>	22		S47T20×1.53	11,086m <sup>3</sup> /s	1,475万m <sup>3</sup>
11		S47T20×1.29	8,875m <sup>3</sup> /s	367万m <sup>3</sup>	23	請田	S28T13×1.20	9,973m <sup>3</sup> /s	2,224万m <sup>3</sup>
12		S57T10×1.34	8,919m <sup>3</sup> /s	2,119万m <sup>3</sup>	24		S40T24×1.45	8,936m <sup>3</sup> /s	1,084万m <sup>3</sup>
				25	S47T20×1.35		9,288m <sup>3</sup> /s	806万m <sup>3</sup>	

※青文字:余裕あり、赤文字:超過

整備計画改修+天ヶ瀬ダム[1,140m<sup>3</sup>/s-400m<sup>3</sup>/s]+川上ダム[70m<sup>3</sup>/s定量](大戸川ダムなし)

出典：淀川水系河川整備計画案に対する京都府域への効果等に関する技術的評価（中間報告）（京都府,H20.9）

## 7.その他

---

- 環境
  - 環境だけを絶対視したり、反対に治水だけを絶対視したりするのではなく、両者をバランス良く相対化して捉えるべき
- 地質
  - 天ヶ瀬ダムの特ネル掘削による周辺地盤への影響については、覆工厚を厚くする特ネル構造にしたり、特ネル周辺地盤を補強することにより、ダム本体を支えている地盤に影響のないように対処することが可能

## 8.京都府にとって望ましい整備計画の事業展開順位

- 各事業の効果と緊急性
  - 桂川改修は必要性、緊急性があり、いかに早く実効を上げていくかが課題
  - 天ヶ瀬ダムは、再開発と適切な運用の工夫により、より大きな洪水に対応できる可能性も十分ある。
  - 大戸川ダムは、大戸川の治水には有効だが、中上流改修の進捗に伴って必要性が順次高まっていく施設であるため、現時点での緊急性は低い。
  - 川上ダムは進捗を急ぐべき。ただし、長寿命化対策の緊急性には、なお検討の余地あり。
  - 三川合流部の掘削は、桂川・宇治川・木津川に効果があるため、早急に検討すべき
- 京都府に関連の深い事業の優先順位
  - 緊急対応を迫られている桂川中、下流部の河道改修を最優先
  - 次に、宇治川の河川改修と堤防強化、天ヶ瀬ダム再開発、川上ダム
  - 大戸川ダムは、中・上流の改修の進捗とその影響を検証しながら、その実施についてさらに検討を行う必要がある。